

七人の兄たちは末っ子妹を愛してやまない5

**ミリイ**

ダルディエ公爵家の  
末っ子妹で転生者。  
動物遣いの天恵を持つ。  
カイルから想いを  
打ち明けられたけれど……

**カイル**

グラルスティール帝国の皇太子。  
ミリイの従兄で  
七番目のお兄様……  
だったけれど、  
一人の男性として  
ミリイを愛するようになる。

**シオン**

ダルディエ公爵家三男。  
異能持ちで  
人の心が読める。  
神瞳を持つ。

**ヴィラル**

ミリイの母の祖国・  
ザクラシア王国の国王。  
王位について思い悩む。

**ルーカス**

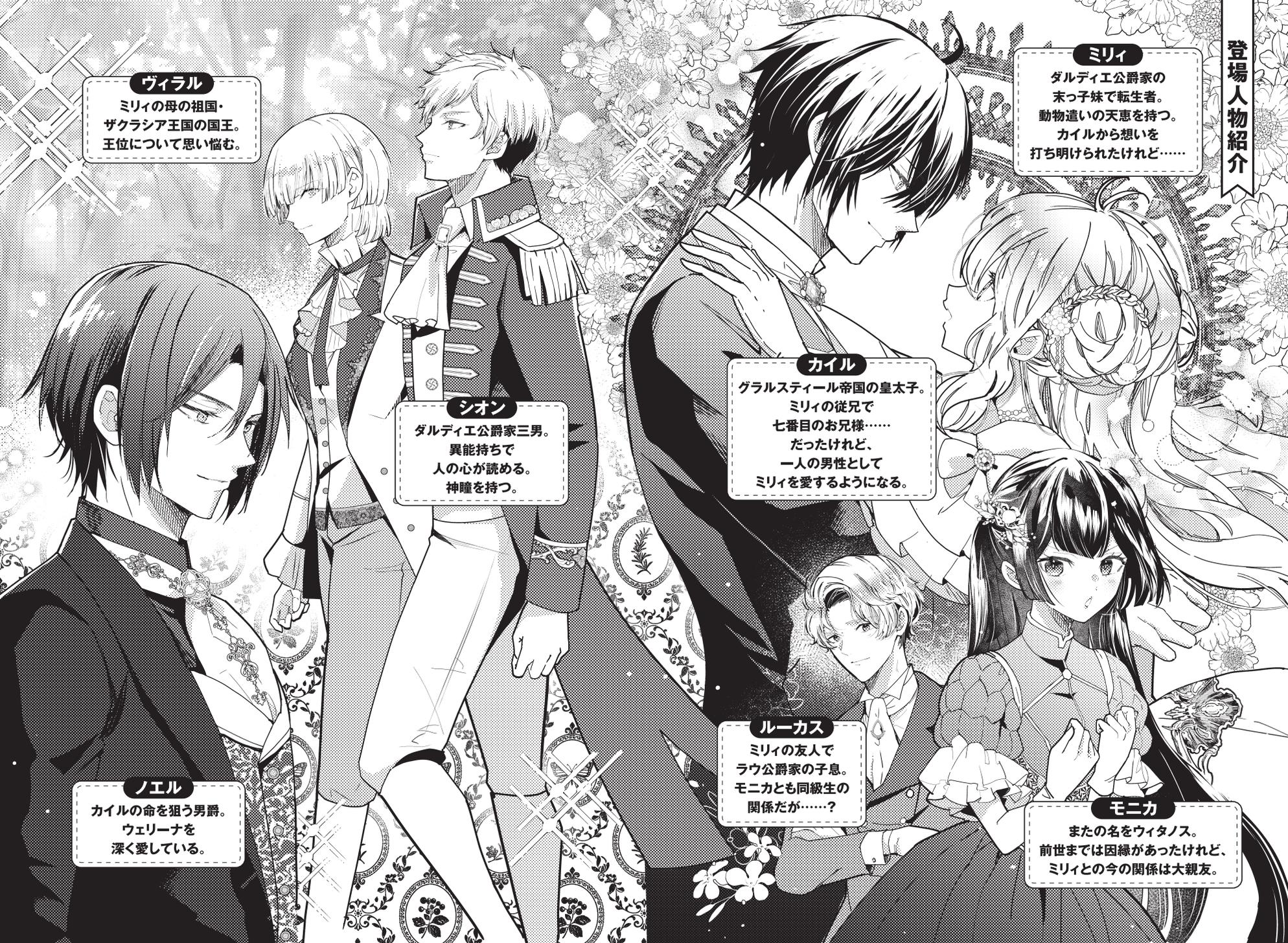
ミリイの友人で  
ラウ公爵家の子息。  
モニカとも同級生の  
関係だが……？

**モニカ**

またの名をウイタノス。  
前世までは因縁があったけれど、  
ミリイとの今の関係は大親友。

**ノエル**

カイルの命を狙う男爵。  
ウェリーナを  
深く愛している。



第一章 末っ子妹は兄の愛について考える

私の身の危険を心配した両親や兄たちの話し合いの結果、私はアカリエル公爵家に一時預けられることになった。

兄たちに会えない寂しさが思ったよりも辛かったが、ある日、たまたま皇宮に用事があった私は、顔を合わせたカイルに嬉しい提案をされて、上機嫌で皇太子宮を後にした。

「オーロラも皇太子宮に行つていいの？」

アカリエル邸に戻つてすぐ、オーロラに皇太子宮へ遊びに行くことを提案した。

「ええ。オーロラは皇太子宮には行つたことがないでしょう。エメルたちが案内してくれるって言つていたわ。初めてのところに行くのは珍しくて楽しいと思うのだけれど、どうかしら？」

「行きたいわ！」

興味津々のキラキラとした目でオーロラが返事をする。オーロラもずっと家に籠こもりきりで退屈しているから、楽しんでくれると嬉しい。

「よかった！ では一緒に行きましょう。オーロラはうちのお兄様で会つたことがあるのはシオンだけかしら？」

「うーん、ディアルド様とジュード様にも会ったことがあるわ」

「じゃあ、エメルと会うのは初めてね？」

「そうなの」

うーん、と考える。私だけでなくオーロラも兄に会えていない。その寂しさが少しだけでも埋められたらいいのにと思っていたのだ。

シオンは天恵の訓練でアカリエル邸へ頻ひんぱんに訪問していた関係で、オーロラとは小さい頃から仲が良い。シオンもオーロラを可愛がっているので、シオンになら甘えられるだろうが、初めて会うエメルでは難しいかもしれない。

ソロソもいるのだが、ソロソはあまり兄っぽい性格ではないので、私はソロソを兄のように感じたことはない。

「エメルはすごく優しくてね、いつもミリイを抱き上げてくれるの。オーロラも抱き上げてもらえたら嬉しいかしら？ ノアヤレオみたいには甘えられないかもしれないけれど、少し甘やかしてもraithたいと思わない？」

「そ、そんなこと言って怒られない？ オーロラのこと図々しいと思うかもしれないわ」

「思わないわよ。シオンだっていつもオーロラを抱き上げるでしょう？」

「だってシオンは小さい頃から一緒なもの」

オーロラは少しもじもじしながら悩んでいる。それもそうかもしれない。いきなり知らない人に抱き上げられるのは嫌かもしれない。相性もあるだろうし。

「無理にとは言わないわ。当日エメルを見て決めてもいいのよ。考えておいて」  
「分かったわ」

それからエメルにすぐに手紙を書き、オーロラと訪問する日程を決めた。

そして皇太子宮を訪問する日、アカリエル公爵家の馬車で皇太子宮へ向かう。オーロラは皇宮自体が初めてらしく、窓から関心深い表情で景色を見ていた。

皇太子宮に到着すると、オーロラの手を握り執務室へ移動する。オーロラは緊張の面持ちで扉の前で待っていた。扉が開かれると、二人で入室する。

「ミリイ、オーロラ嬢、いらっしやい」

カイルが机の前から移動し、こちらに向かってきた。

「オーロラ、皇太子殿下です。こちらはミリイの兄のエメル、それと……あら？ ソロソは？」

「ソロソは用事で少し出ているんだ」

「そうなのね」

オーロラはカイルにカーテシーでお辞儀をする。

「初めてお目にかかります。オーロラ・ル・アカリエルと申します。本日はお招きいただき、ありがとうございます」

「ミリイと仲が良いと聞いています。歓迎しますよ」

カイルには珍しく、初対面の相手なのにほんのりと笑みを浮かべている。オーロラはほっとした表情で今度はエメルを見た。

「エメル様、いつもミリイお姉様にはお世話になっています。ありがとうございます」  
いや、オーロラよ、今お世話になっているのは私の方ですよ。

「こちらこそ、いつもミリイと遊んでくださり、ありがとうございます」

エメルがオーロラの手の甲にキスをすると、オーロラの頬が少し高揚した。よかった、オーロラはエメルが苦手ではなさそうだ。これならすぐに仲良くなれそうである。

「……え!?」

カイルが急に私を抱き上げた。

「カイルお兄様?」

「せっかく来たのだから、俺の相手もしてくれないとね?」

いやいや、今はオーロラの緊張を解く手伝いをするのが先だろう。ちらっとオーロラを見ると、少し羨ましそうな目をしている。あれ、やっぱり、抱き上げてほしいんじゃないかな?

「……エメル、もしよかつたらオーロラを」

そこまで言っただけ、そういえば、結局抱き上げてもらうのかオーロラに聞いていないことを思い出す。オーロラに聞くのが先かな? と考えていると、エメルがこちらの意を酌んでくれた。

「オーロラ嬢、もしよろしければ、今のミリイのように私が抱き上げてよろしいですか?」

オーロラは可愛い目をぱちぱちと瞬きし、笑みを浮かべて言った。

「はい!」

エメルはオーロラを優しく抱き上げた。オーロラは兄で抱っこ慣れしているし、エメルは私を抱

き上げ慣れている。だから危なげなく抱き上げられたオーロラは、リラックスした様子でエメルに話しかけた。

「久しぶりに抱っこしてもらえました。ありがとうございます」

「こんなことでしたらいつでもおっしゃってください。オーロラ嬢であれば、喜んでいたしますよ」

うーん、エメルとオーロラは美男美女で絵になる。キラキラしていて目の保養である。

それから、四人でお茶会をする。四人で話すというより、ほとんど私とオーロラが話しているのをカイルとエメルが聞いているだけなのだ。オーロラとエメルはかなり打ち解けたような気がする。

「そうだ、エメル。オーロラ嬢に皇太子宮の案内をしてあげたらどうだ? 一階から三階までなら見て回ってもいいぞ」

「それはいいですね。オーロラ嬢、いかがですか?」

「はい、ぜひ!」

オーロラが嬉しそうに笑うので、エメルも笑う。二人は席を立つと、手を繋いで部屋を出て行った。私とカイルはソファアに場所を移す。

「オーロラって可愛いでしょう!」

「そうだね。ミリイが可愛いのも分かる」

カイルは笑みを浮かべる。



「今日はオーロラも招待してくれてありがとう、カイルお兄様」

「いいんだ。俺はミリィに会いたかっただけだから」

「ミリィもカイルお兄様に会えて嬉しい」

カイルに抱きつく。カイルの匂いがする。落ち着くなあと思いながら、カイルから体を離れた。じーっとカイルを見る。

「ミリィ？」

うーん、今日のカイルを見る限り、いつものカイルだと思う。私の兄としてのカイル。本当に一人の女性として私を愛しているのだろうか。やはりいつも通り過ぎて、よく分からない。

カイルの求婚のことを真剣に考えたいと思っている。ティアママは兄としての兄妹愛と一人の女性に対する恋愛感情が混在していると言っていたけれど。でも私はまずはカイルの言う、私に対する恋愛感情を私自身が確認したいと思うのだ。

「カイルお兄様は、ミリィと結婚したいのよね？」

「そうだね」

「ミリィを妹としても、女性としても愛しているのよね？」

「そうだよ」

「……カイルお兄様が、ミリィを女性として愛しているのってどんなところなのかしら？」

「いっぱいあるけれど、俺に向ける笑顔や視線、甘えてくれるところとか、抱きしめてくれるところとか、愛情を向けてくれるところ、可愛いところとか……」

カイルはつらつらと続けるが、だんだんと私は首を傾げる。

「えっと、じゃあ、ミリイを妹として愛しているのってどんなところ？」

「そうだなあ。笑顔、甘えてくれるところ、抱きしめてくれるところ、愛してくれるところ、何をしても可愛いところ……」

カイルにとつても兄妹愛と恋愛感情、そんなに違いがなくないか？ やはりそれらは全て妹への愛なのではという謎がさらに深まる。質問の仕方が駄目だったのだろうか。

カイルの私に対する気持ちを私が確認するには、どうすればいいのだろうか。いつも通り楽しく話をしても、いつも通りカイルからは妹として愛されていると思うのだが、どのあたりに恋愛感情を持っているかが分からない。

カイルがいる時はいつもエメルもいるので、一緒に過ごしている時間の中でエメルが「はい、今のが恋愛感情由来ですよ」と指摘してくれるといいのだけれど。今度エメルに頼んでみようか。カイルが嫌がるだろうか？

うーん、難しい。気持ちを確認する良い案がなかなか浮かばない。

「ところでミリイ」

「なあに？」

「エメルたちが帰ってくる前に、唇にキスしていいかな」

その瞬間、顔が熱くなる。

前は兄からのキスなら、頬にキスも唇にキスもそんなに変わらないものだと思っていたのに、最

近恥ずかしさが増しているのだ。どうしてだろう。やっぱり頬と唇とは違うのだなと気づきました。

「……い、いいわよ」

カイルは嬉しそうに笑い、私の背中に手を固定すると唇にキスをする。勝手に涙が出るけれど嫌なわけではない。目の前のカイルになぜかドキドキして、それ以上頭が働かなくなるのだった。

オーロラはエメルとの皇太子宮の見学が楽しかったようで、馬車で帰宅中ずっとその話をしていった。楽しんでくれて何よりだ。帰る前にはオーロラはエメルの膝ひざに乗せてもらったりして、ずいぶんエメルと仲良く話をしていた。

「ミリイお姉様、今日は皇太子宮へ連れて行ってくれてありがとう！」

「楽しんでくれてよかったわ。エメルと仲良くなれた？」

「ええ！ エメル様、とても優しいわね！ 抱っこもしてくれて！ 膝にも乗せてくれて！ 今度行ったらまたしてくれるかしら？」

「してくれるわ。三日後が楽しみね」

また皇太子宮へ遊びに行く約束をしてきたのだ。次は三日後である。

「ノアやレオみたいにはいかないと思うけれど、オーロラが甘えたらエメルも応援たすしてくれると思うわよ」

エメルとオーロラは十一歳離れている。エメルのオーロラを見る目は、私の小さかった頃を思い出しているような優しい目をしていた。

「そうかしら！ 今度は頬にキスしてみようかしら！」

「いいと思うわ！」

皇太子宮への訪問は、互いの兄が傍にいない寂しさを少し紛らわせた。

次の日、オーロラは家庭教師の日で勉強中なので、私は部屋で本を開いていた。けれどあまり内容が頭に入ってこず、結局本を閉じる。

(ナナに会いたいなあ)

先祖返りのナナの存在をアカリエル公爵に知られるわけにはいかないので、ナナはダルデイエ邸に置いてきている。ナナは生まれた時からずっと私と一緒にいるので、今頃私に会えなくて鳴いているのではないだろうか。

私もナナに会えなくて寂しい。一度ダルデイエ邸に行きたいと思うけれど、それでは私が狙われているのを回避するために、アカリエル邸に隠れている意味がなくなってしまうので、それもできない。

ふう、と息を吐く。

私が狙われているせいでナナに寂しい思いをさせているのだ。私が我慢できなくてどうする。

違うことを考えよう。私には考えなくてはならないことがある。

「ねえ、カナン。カイルお兄様はミリイを妹としてだけでなく、女性として愛していると言っているでしょう。カナンから見ると、カイルお兄様は本当に私に恋愛感情を持っているように見える？」  
目の前のテーブルに紅茶を用意してくれたカナンに声を掛けた。

「見えますよ。というか、八割方、一人の女性に対する愛をお嬢様に向けていると思います」

「そんなに!？」

「お嬢様観察が趣味の私が言うのですから、間違いありません」

「……」

堂々と主人に対し、私の観察が趣味と言っのを止めてほしい。まあ、もう慣れたけれど。

でもそうか、カナンにもそんな風に見えるということは、カイルが私に恋愛感情を持っているのは間違いないのだろう。両親や兄たちも気づいていたというし。ということは、私だけが本当に気づけていないということである。

「どうしてミリイだけ、カイルお兄様の気持ちに気づかなかったんだろう……」

「皇太子殿下はお嬢様の兄であることは間違いありませんから、兄からは兄としての愛情のみがもたえるはずだと、お嬢様は思い込んでいたのだと思いますよ」

「……でも、それが普通よね？」

「そうですね。皇太子殿下がお嬢様に恋をしなければ、それが普通だったでしょう」

恋か。それには何かきつかけがあったのだろうか。

「カイルお兄様はいつミリイに恋をしたのかしら？」

「さすがに私も侍女になる前のことは分かりませんが、私が侍女になった時には、すでに皇太子殿下はお嬢様が好きなのではと思うことがありましたよ」

「え!? そんなに前から!? カナンが正式に侍女になったのって、ミリイが十三歳くらいの時じゃ

なかった?」

「そうですね。ただ皇太子殿下は今ほどお嬢様に恋愛感情を向けているわけではなかったの、お嬢様のことが好きなのではないか疑惑」程度です」

ええ? さすがに十三歳では子供すぎて恋の相手にはならないよね? その時のカイルは十七歳だから、守ってあげたい、というような保護的な感情が湧いていたのではなからうか。

「うーん、難しいなあ。……カイルお兄様がミリイに恋をしているなら、もうミリイはカイルお兄様に、兄として接しては駄目なのかしら」

「そんなことはないと思いますよ。私が思うに、皇太子殿下はお嬢様からの兄妹愛も、恋愛的な意味の愛情も、両方もらいたいと思つていてと思います。欲張りですねえ」

カナンの瞳がキラリと光った気がした。

カナンの言うとおりなら、今まで通り兄として接することに問題なさそうだ。とはいえ、兄妹愛と恋愛感情の違いがいまだよく分からない。

「カイルお兄様の言う、恋愛感情を確認するにはどうしたらいいと思う?」

「そうですね……、皇太子殿下に口説いてもらえばいいのでは?」

「口説いてもらう? ……うーん、昨日ミリイの愛しているところを言ってくれたのだけれど、妹に対するものと女性に対するものの違いが、よく分からなかったわ」

そもそも、カイルは普段から愛を伝える人なので、言われ慣れ過ぎて違いが分からないのかもしれない。

「でしたら、表情はどうですか? 皇太子殿下はお嬢様に対しては表情豊かですから。表情で比較してみるといいかもしれません」

表情か。そう言われると、その違いに注視していなかった気がする。うん、今度カイルに直接確かめてみよう。

「ありがとう、カナン。その案いただくわ」

よし、次に考えるべきは、私のカイルに対する気持ちだろう。

カイルを兄として愛しているのは間違いない。では男性としてはどうなのか。

カイルと接しているときゅんとする時がある。でもそれは他の兄に対してもあるので、これは兄に対する気持ちだと思っ。

他の兄との違いを感じる感情といえば、唇にキスされた時の胸が掴まれたような、きゅうううとした感じだ。ただそれはカイルしか唇にキスしてくれないから他の兄とは比べられない。だからあの気持ちか兄に対するものなのか一人の男性に対するものなのか、検証ができない。

そこまで考えて、顔を手で仰いだ。今、唇にキスしているわけでもないのに、それを考えただけで顔が熱くなってきた。なんだか恥づかしいなあと思いつつカナンを見ると、じーつと私を見ていた。

「な、何かしら!?!」

「お嬢様、今、皇太子殿下とのキスのことでも考えていましたね」

「ど、どうしてそう思うの!?!」

「お嬢様は考えていることが顔に出ますから」

ここはプライベートだし表情を作っているわけではないから、分かりやすいといえばそうなんだろうけれど、でもカナンが鋭いんだと思う！

「もうやだ、恥ずかしい……」

「恥ずかしかつているお嬢様は、最高に可愛いです」

真顔で言わないでくれませんか。さらに恥ずかしくなるから！

「はあ……。どうしてカイルお兄様とキスすると恥ずかしくなるんだろう……」

「頬ではなくて唇にキスするからではないですか？」

「……え!? どうして唇にキスしているのを知っているの!？」

カイルが唇にキスする時の私を他の人に見られたくないと言っていたから、他の人がいる場所ではないはずなのに。

「以前、ダルディエ邸で皇太子殿下の唇にキスされましたよね。私もその部屋にいましたよ」

「うん、そんなこともあったけれど、あの時カナンは仕事をしていたでしょう!? 見ていなかっただよね!？」

「お嬢様観察が趣味の私が、見ていないはずはないではないですか」

そうだったあ！ カナンはそういう子だった！ 時々カナンの背中にも目があるのではと思う時があるくらいだ。たとえ下を向いていたって、私を見ていないはずがない！

カイル、ごめん。もう見られた後でした。

「カイルお兄様は、唇にキスした時の私を他の人に見られたくないみたいなの。カナンが見ていたこと、カイルお兄様に内緒にしてくれてくれる？」

「もちろんです」

ほっとする。カイルと約束してしまっているから、今後誰かに見られないようにしなければ。まあ、カナンはもう知っているからいいのかな。あ、駄目だ、私の『顔』を見られたくないと言っていたのだった。

もうキスのことを考えるのは今日はやめよう。恥ずかしかつているのをカナンに観察され続けるなんて、どんな羞恥プレイかという感じである。

他に考えることがあつたかな。

そうだ、もう一つあつた。もし検証の結果、カイルと私の気持ちが一致したと確認できた場合。

そうなると見えてくるのは結婚だろう。カイルは皇太子であるから、普通の結婚とは違う。もし結婚したら、私は皇太子妃になるわけだが、それが私に務まるのかどうか。愛という感情だけで成立するほど、その地位は優しいものではないと思うのだ。

カイルには婚約話が大量に来ていてとエメルに聞いている。その中には他国の姫、我が国の貴族の娘など錚々たる人物が集まっているはずだ。その中に仮に私も入っているとして、候補者の中で私は皇太子妃に相応しい人物なのだろうか。

そういえば、その中にはカイルの父方の従兄妹サヴァル侯爵令嬢であるエレノアも入っているはずだ。カイルはエレノアは冗談で釣書を持ってきていたと言っていたけれど、それはカイルの

考えである。エレノア本人は冗談ではなかったとしたら？

エレノアとカイルは仲良さそうだし、皇太子妃候補としては筆頭に近いのではないだろうか。

「カナンはエレノア様、サヴァルア侯爵令嬢のことを知ってる？」

どこからともなく噂を拾ってくるカナンだから、多少は知っているだろう。

「知っていますよ」

「どういった方なのかしら？」

「そうですね……、私も詳しくはないのですが、確かサロンの三大派閥はまの一つの中心人物だったと思います」

サロンに派閥があるのは私も知っている。私は派閥争いに興味がないし、そもそもそういったサロンに参加しない。私も詳しくはないが、サロンは知的な会話を楽しむ場でもある。その中心メンバーというなら、エレノアは頭が良く切れ者なのかもしれない。

美人で社交に優れ、頭もいいエレノアに私が勝てる要素などあるのだろうか。

私は学園では勉強も頑張っていたし、悪い成績でもなかった。だから頭の良さは普通より上くらいだろうか。でもお茶会やサロンにはほとんど参加しないし、社交が得意かと言われると微妙だ。

他には？

自分のいいところなんて、他には思いつかない。

急に目頭が熱くなって目に力を入れた。こんなことで泣いては駄目だ。

「お嬢様!？」

急に私がウルウルしたものだから、カナンが慌てている。大丈夫、まだ涙は落ちてないから、泣いてない！

「……ごめんね、ミリイは何もできないただの子供だと思ったら、なんだか情けないなって思ってる」

「何を言っているのですか!? お嬢様が情けないことなんてありません！ 私からすれば、女神のようなお人ですよ！」

「……ありがとう、カナン」

カナンはいまだに私に助けられたと思っっているから、こういう優しいことを言ってくれるのだ。ダルデイエ公爵家という後ろ盾を取ったら、ほとんど何も残らない私だけけれど、家同士の結婚という意味なら、私の素地が大したことないことは関係ないのかもしれない。私自身が皇太子妃として相応しくなくても。こんなことを気にしているのは私だけなのかもしれない。

まだ何も分からないのに勝手に想像して自己嫌悪して、よくわからなくなって、結局何も導きだせていない自分ばかりする。考えれば考えるほど迷宮に迷い込んでいる気がする。

そしてまた皇太子宮へ遊びに行く日がやってきた。

オーロラと一緒に皇太子宮へやってきて、ソファで私がカイルの膝に座り、オーロラがエメルの膝に座っていた。

「そうだ、カイルお兄様にお願ひがあるの。いいかしら？」

「いいよ。何かな」

「ミリイの頬に、お兄様としてのキスと、恋愛の意味でのキスをしてほしいの」

「……今？」

「うん」

カナンのアドバース通り表情で比較するとして、これなら、兄妹愛と恋愛の違いが確認できるかと思っただのだ。

カイルはちらりと横を見る。エメルはいつもの笑顔だけれど、オーロラがキラキラとした瞳を私たちに向けている。

「エメルもオーロラ嬢もいるのだけれど。……なんだか、オーロラ嬢ってミリイに反応が似ているな」

「いつもみんないても、キスしてるでしょう？」

「改めて宣言されてからだと、俺も緊張はするんだよ」

うーん、いつもカイルはエメルがいても関係なく頬にキスをくれるから、オーロラの前というのが気になるのだろうか。

「エメル、ちょっとだけオーロラと部屋を退出してもらえないかしら？」

「……三分だけなら、いいですよ」

洩々といった感じでエメルが答えると、カイルも頷く。オーロラは残念そうにしていたけれど、エメルと二人で廊下へ出てくれた。

「さあ、カイルお兄様！ まずはミリイに兄としてのキスをください！」

「分かった」

カイルは優しい笑みを浮かべ、私の右頬にキスをくれた。うん、いつもの感じ。兄としての愛を感じました。

「ありがとう、カイルお兄様。次は恋愛のキスをください」

「うん」

また笑みを浮かべるカイルの瞳に色気のようなものが含まれた気がした。その視線が熱く感じてドキッとしているうちに、左頬にキスをくれる。

いつもの感じ……ではない！ え？ こんな視線でいつもキスされていたの？ なんだか、カイルではないような感じだ。

その熱い視線のまま、カイルが口を開く。

「俺が女性として愛しているのは、ミリイだけだよ」

顔が熱くなってきた。左頬を手で押さえる。頬のキスされた部分が一番熱い気がする。唇にキスされるのと同じくらい恥ずかしくて、視線をカイルに向けてることができない。

笑う気配を感じ、ついカイルを見ると、愛し気に私を見ていたカイルが私を抱きしめた。

「もうミリイは……俺の心を掴んで離さないなあ。こんなに愛しい存在は他にはいないよ」

抱きしめるカイルの温もりを感じている間も、なんだか胸がきゅーっとしていつぱいいつぱいだった。確かにカイルが私に向ける、兄妹愛と恋愛感情は違う。やっと気づいたそれに、もう少し私も向き合いたいと思った。

「もう三分経ちましたよ」

エメルとオーロラが戻ってきた。カイルの抱きしめていた力が緩み、カイルから体を離す。いまだカイルにキスされた左頬から手を離せない私を見て、オーロラが自身の口に手を当てた。

「なんだかミリイお姉様、色っぽい」

「え？」

カイルがまた私を抱きしめる。顔を隠されてしまい、エメルとオーロラが見えなくなってしまう。

「オーロラ嬢、少しの間、ミリイを見るのは禁止で」

「え!? 分かりました？」

疑問的に返事をするオーロラの声が聞こえる。なんで私を見たら駄目なんだろう。

「……カイル様、頬にキスしただけですよ？」

「そうだ」

エメルの疑いの声が聞こえる。私はどんな顔をしていたんだ？ 顔が熱いから、赤くなっているだろうなということは分かるのだが。

それからカイルは私の顔が元に戻るまで、離してはくれなかった。

皇太子宮へは三日に一度ほどの間隔で遊びに行き、楽しい時間を過ごした。

最初にオーロラがエメルの頬にキスした時は、エメルはびっくりしていて、「私、オーロラ嬢の

兄に殺されませんか？」と眉を下げていた。しかし、オーロラがキス待ちをしていると、仕方がないという困った顔で笑いながらエメルはオーロラの頬にキスを返していた。

そんな感じで七回ほど皇太子宮を訪問したため、オーロラとエメルはすっかり仲良しだ。今ではエメル、オーロラ、と呼び捨てにしているくらいだ。時々ソロソも部屋にいたことがあったが、「俺がいない間に何があったんですか!? ずるくないですか!？」とエメルに文句を言っていた。

また、カイルの仕事が終わるのを待つこともあったのだが、ある日、カイルに手招きされ机に向かうと、「エメルとオーロラ嬢が不在になる用事とかないかな？」とこっそり言われた。

仕事をしていたのではなかったの？ と呆れた。書類を確認したりする手は動いているのに、よく二つも三つも別のことを考えられるものである。

カイルの恋愛感情を確認して以降、私なりにカイルを男性として意識するようにしている。しかしカイルに会うと、ついいつも通り兄として接してしまう。急に態度を変えたりするのは難しい。まだ今はカイルを兄として愛している部分が大いからだと思う。

それに、アカリエル邸で一人でいる時なんかには、カイルの熱い視線を思い出すと、頭が沸騰してしまつて上手く考えられない。

そんな中、アカリエル邸のオーロラのバスルームで、オーロラと一緒にバスタブに入っていた時。泡を互いに吹きかけて遊んでいると、ふとオーロラが耳を貸してと言ってきた。なんだろう、とオーロラに近寄ると、オーロラが耳元でこそこそと話す。この部屋には私たちを洗ってくれる使用人しかいないのに。そんなにこそこそしなくても。

「あのね、内緒にしてね？ オーロラ、エメルが好きになったみたいなの！」  
「え!？」

「オーロラは指一本を唇にあて、しーつと言う。  
「ほ、本当に?」

「オーロラがニコニコと嬉しそうに笑っている。あれ、予想外だぞ。エメルは兄たちの代わり、というとエメルには申し訳ないけれども、要は兄に会えない寂しさを減らしてくれる存在がエメルだったはずだ。」

「ノアとレオって、オーロラのそういう話にヤキモチを焼いちゃうよね?」

「そうなの! だから内緒ね!」

「うーん、これは私もノアとレオに怒られるパターンだろうか。怖い。」

「ミリオお姉様のお兄様たちも、こういう話は嫌がるでしょう?」

「ううん? 心配はされるけれど、ヤキモチみたいなのではないと思うなあ」

「どちらにしても、私の恋は今まで成就したことはない。兄がどうこう言う前に始まりもしなかった。」

「いいなあ。お兄様たちのことは大好きだけれど、あのヤキモチ焼きがねえ……。もうすぐミリオお姉様も帰ってしまうでしょう? そしたら、エメルと会えなくなっちゃう。でも連絡を取り合う方法がないし」

「ああ、そういうことね。だったら、こういうのはどう? いつもオーロラがミリオに手紙をくれ

るでしょう。その中にエメルの手紙も別に入れるの。ミリオがエメルに渡すわ。そしてエメルから返事を貰ったら、ミリオの名前でオーロラに手紙を渡せばいいでしょう?」

「お、お姉様天才!? それいい! お願いしてもいいかしら!？」

「もちろん、いいわよ」

もうこうなったら、ノアとレオに怒られる覚悟である。それに私が手紙を渡したとしても、それが実際の恋愛に発展するかは分からないのだから。でも十一歳差かあ。いや、悪くないと思う。

風呂から上がり、寝間着に着替える。この寝間着はジュードにお願まがいして作ってもらった。アカリエル邸へ来る時にオーロラの分も作ってもらったのでお揃そろいだ。寝間着の上と下は繋がっていないが、リボンを結ぶと上下が離れない作りになっている。またリボンが水色で可愛い。夏なので袖はなしのノースリーブで、ズボンも膝丈までで膝の端はゴムでできている。

寝る前に会話をしていたが、私もオーロラもいつの間にか眠まってしまっていた。

夜中、何かの気配で目が覚めた。まだ寝ぼけた目を手で触り上を見る。

「……ノア?」

「こ、ごめん!？」

こちらを向いていたノアが後ろを向いた。

「オーロラだけだと思って! すぐに失礼するから!」

ノアはすぐに去って行った。

何だったんだ。何でノアがいるんだ。オーロラはどこにいった、と横を見ると、オーロラはぐっ

すりと眠っている。うん、オーロラいるね。大丈夫、大丈夫……。  
すぐに寝入るのだった。

夜中にノアを見た気がした、その次の日。

オーロラの起きる気配で目が覚める。お互いまだ寝ぼけ眼のままベッドでぐだぐだしていた。オーロラに抱きついてオーロラの柔らかい頬ほほを触りながら、何かさういえば話すことがあったような、と思いつく。

「オーロラ、昨日の夜中にね、ベッドの横にノアが立っていた気がするの」

「ノアお兄様が？」

「うーん、夢だったのかしら……」

がばっとオーロラが起き上がる。顔は嬉しさが隠しきれしていない。

「ノアお兄様が帰ってきたんだわ！」

オーロラはパタパタと部屋を出て行ってしまった。なんだろう、天恵か何かでノアがいるのを確認したのだろうか。オーロラが嬉しそだったので何よりである。

私はいつも通り運動用の服に着替えて柔軟体操をし、部屋でドレスに着替えて朝食に向かうと、そこにはオーロラとノアがテーブルに着いていた。

「よかった、お姉様！ 今呼びに行こうとしていたのよ」

「ちょうどよかったのね。ノア、久しぶりね」

「ミリイ、久しぶりです」

三人で朝食を始める。

「ノアだけ帝都に？ レオは？」

「レオはまだアカリエル領です。俺は用事があつて急遽帝都へ」

「そうなの。でもノアだけでも顔が見られてよかったわね、オーロラ。いつも寂しかったものね」

「うん！ オーロラもう嬉しすぎて！」

見ていれば分かる。オーロラはノアから目を離さないのだ。ノアへの愛しさが溢れている。

「ノアはもしかして、ミリイがアカリエル邸に泊まっているとは知らなかったの？」

「そうなんです……。母上はそういつたことを連絡してくれなくて」

「ううん、昨日は申し訳なかったわ。せっかくオーロラに会いに行ったらミリイがいて邪魔しちゃったんでしょう」

「いえ、謝るのは俺のほうで……」

なぜかノアの顔がほんのり赤い。なんでだ？

「どうしてノアが謝るの？」

「いや、あの……」

どう言えいいのか困っているようだ。

「オーロラ分かるわ。ミリイお姉様の色気に当てられたのでしょうか？ ノアお兄様だったら、すごく純情なの」

「オーロラ!？」

色気？ 昨日の寝間着は色気のある恰好ではなかった。胸が見えるような首元ではないので、どう間違っても胸は見えない。お腹が見えないよう上下をリボンで繋げていた。ノースリーブも普段からドレスではノースリーブみたいなものだし、恥ずかしいと思う部分ではない。足は膝丈で短くはないし。

あれ、足かな？ 足を見せるのがあまりよくないからか？ 膝下の足が見えていたのがよくなかったのだろうか。もしかしたら寝ている間に膝のゴムが少し上上がったのかもしれない。

「昨日のミリィ、色気のある部分なんてあった？ 足が少し見えていたのかしら？」

「ミリィお姉様はいつも色気がすごいわよ。寝起きとかオーロラいつもドキドキするもん。抱きつくとき柔らかいし」

「……えっとお、それはノアがミリィの身体を触ったってこと？」

「触っていませんよ!？」

じゃあ何だ。オーロラだって寝起きはいつも可愛い。普段だって可愛いけれど。

ノアは焦った表情になっている。

「ノア、はつきり言ってくれないと分からないわ」

「いえ、その……。昨夜、夜中に帝都に着きまして。オーロラのベッドで一緒に寝ようと思ったら、ミリィがいます。あんな姿を見てしまい、申し訳ないと」

「あんな姿って何かしら？ 具体的に言ってみて？」

「いや、あの、寝間着といますか」

「うん、寝間着を着ていたわね」

「はい……」

「……え!? それだけ!？」

ただの寝間着をあんな姿と言われたら、こっちはどうすればいいんだ。

「そのどこのノアが恥ずかしがる要素があるの？ オーロラだって同じ寝間着を着ていたでしょう」

「オーロラはオーロラですし」

なんだそれは。意味不明。

「お姉様、ノアお兄様は、ドレスでもない薄手の寝間着姿のお姉様を見ただけでも、許可なく見たいいけないものを見てしまった！ って恥ずかしがる純情な男なの」

「オーロラ、ちよつと黙って!？」

あれ、そう言われると、それが一般的かとも思い直した。寝間着なんて異性には見せないものだ。家族でもない人を見れば、そう思ってしまうものかもしれない。

「なるほど、少し理解できたわ。ノア、ミリィのことは気にしないで。ノアはオーロラの兄ですもの。ミリィの兄とまではいかなくても兄に準ずるものと見ているし、寝間着を見られたからって結婚してと迫ったりしないわよ」

「いえ、さすがに結婚を迫るとまでは思っていないんですが……一応謝らせてください。申し訳ありません」

「いいえ、お気になさらず」

ノアは真面目だなあ。それにしても。

なんだか可笑しい。笑ってしまえそうだ。

「んふっ……んふふっ」

「お姉様？」

ふふふふと笑いながら、涙まで出てきた。

「ごめんね、だって可笑しくって！ オーロラ、ノアって学園で四天王だったの知ってる？」

「四天王？」

四天王とは学園の生徒たちが勝手に付ける四人の男性のことだ。格好いいのが大前提で、それに頭が良いとか、剣術が強いとか、そういったものの総合評価で付くのだ。同じ学年などではなく在籍している生徒から選ばれるが、当然非公式である。生徒たちがそれを勝手に付けて楽しんでるだけだ。

「そう！ 誰が格好いいかとか、そういったことで付けられるのだけれど。ミリィが五年生の時の四天王の一人がノアだったの。しかも氷の貴公子とか呼ばれて」

「ええ!? 何それ、オーロラ聞いていないわ！」

「いいよ、聞かなくて……」

ノアは手で目を覆い恥ずかしがっている。

ちなみに、私が五年生の時の四天王にはルーカスとレオも入っていた。

「ノアったら、いつも冷静だから氷って付いたと思うのだけれど。普段女の子に優しいでしょう。エスコートも素敵だし、寄ってくる女の子って多いのではないかと思うの。なのに寝間着だけでそんなに赤くなるなんて、意外性がね！ 笑ってごめんね、ノア」

「いいですよ……」

「やっぱり兄弟でも違うのねえ。レオは女の子に対して結構軽めでしょう。うちのお兄様たちもそのあたりはバラバラだわ」

「レオは軽すぎるのですよ」

ノアは手を戻し、少し赤い顔で溜め息をついている。

使用人がノアに近づき、声を掛ける。

「オキシバル伯爵様の朝食ですが、こちらにお呼びしてもよろしいですか？」

「ああ、うん。いいよ」

使用人が離れていくのを見ながら、ノアに声を掛ける。

「ノア、オキシバル伯爵って」

「ああ、昨日一緒に帝都入りしたのですよ。今日だけうちに泊まっています」

ええ!? オキシバル伯爵って、あのオキシバル伯爵よね!? 一度見て一目惚れして、それ以降一度も会えなかったあの？

もしかして、食事を一緒にするの!? どうしよう、緊張する！

オキシバル伯爵が部屋へ入室してきた。記憶通りの冷たい印象。

「おはようございます、伯爵。こちらダルディエ公爵家のミリディア嬢です」

「はじめまして、オキシバル伯爵。お会いできて光栄です」

「……北公の？ ほう」

目がキラッと光ったように見える。

「北公の令嬢がなぜここに？」

「オーロラと仲が良いので、遊びに来ているのですわ」

「オーロラと？ ——お前の婚約者候補ではないのか？」

「違いますよ」

オキシバル伯爵とノアは仲が良さそうである。

ただ、私はオキシバル伯爵にまだ様子を観察されている。

私はというと、好きだったオキシバル伯爵に会えたのに、そんなにドキドキしない。あれ？

その後、会話が弾むことはなく、オキシバル伯爵は素早く朝食を済ませ、部屋を退出していった。もしオキシバル伯爵に会えたなら、好きなタイプくらい聞こうと思っていたのに、いざ会ってみれば、そんな気にもならなかった。オキシバル伯爵は好みであることは間違いないのだけれど。おかしいな。

結局、朝食以来オキシバル伯爵は見かけなかった。屋敷を出たらしい。オキシバル伯爵と一緒にいられたのは、ほんの少しの時間だけであった。けれど、特に残念とも思っていない自分に首を傾げる。あんなに会いたかったはずなのに、その気持ちはどこへ行ったのだろう。

その後、オーロラが大好きな兄と相思相愛な時間を過ごしている間、私は読書をしたりして過ごす。ノアが帰ってきたのは一時的なものらしいが、それでも兄に会えたオーロラが羨ましくなっていた。私もエメルやカイルに会っているものの、他の兄にも会いたいし、また寂しい気持ちがぐり返ってきている。

もうすぐアカリエル邸へやってきて一ヶ月経つ。そろそろジュードが帝都に戻ってくるのではと連絡を待っているのだが、まだ来ない。溜め息をついてしまう。

その日の夜、オーロラと寝たがるノアとオーロラの取り合いをした。

「ノア、ミリイはオーロラがいないと寝られないの！ オーロラはあげないわ！」

「困ります！ 俺は帝都に数日しか滞在できないのですよ？ オーロラと寝るのを楽しみにしているのに」

「二人共、喧嘩しないで。いい案があるわ。三人で寝ればいいのではないかしら」

「それいいわね！ そうしましょう」

「いやいや、駄目でしょう！ ミリイは妹ではないのですよ!？」

ノアは常識人だなあ。結局その日、ノアはしぶしぶオーロラを譲ってくれた。

そして次の日。ついにダルディエ邸から迎えがやってきたのである。

「シオン！」

「ミリイ」

走ってシオンに抱きついた。シオンがぎゅうっと抱きしめてくれ、顔を上げると抱き上げてくれ

る。シオンに会えて嬉しすぎて顔中にキスをする。涙まで出てきた。

「会いたかった！ 寂しかったの！」

「遅くなってごめん。泣くな」

「うー……もうミリイを寂しくしないで」

「悪かった」

涙が止まらないので、シオンの肩に顔を付けて泣く。シオンは私が落ち着くまで頭を撫で続けた。今日はこのままシオンと共に帰れるという。使用人が帰りの支度をしている間、やっと涙が止まった私の涙の痕をシオンが指で拭っていた。

「シオンが迎えに来るとは思わなかった。ジュードが来ると思っていたのだけれど」

「ジュードは明後日帝都に着くらしい」

「そうなのね。ザクラシアの件はもう大丈夫？」

「ほぼな。ミリイの誘拐に動いていた奴らは全部片付けた。まあ、まだ警戒はした方がいいだろうが、前ほどではない」

「よかった。シオンありがとう」

「ああ」

「……怪我はしていないよね？」

「してない」

ほっとする。

「帰ったら、ミリイはしばらくシオンにくっついて回るからね」

「いいよ」

ああ、嬉しい。大好きなシオンが帰ってきた。これからは一緒にいられると思うと、嬉しさが溢れる。

それからシオンと共にダルディエ邸に帰宅する。

帰った途端、猫のナナが飛びかかってきた。ナナは私より大きいので、ナナを支えられず後ろに倒れそうになったところを、とっさにシオンが私を支えてくれる。

「ナナただいま。ごめんね、寂しかったでしょう」

ナナに顔を付ける。ナナの寂しかった気持ちと会えて嬉しい気持ちが伝わってくる。寂しい思いをさせて、可哀想なことをしてしまった。

それからナナは私から離れなくなってしまった。元々私にくっついて移動する子だけれど、今は片時も離れたくないみたいだ。だから、シオンにくっつく私、私にくっつくナナという構図が出来上がっている。

ソファアでシオンと並んで座りながら話をする。ナナは私の膝に頭を乗せ、私はナナを撫でながら口を開いた。

「ザクラシアの件が大丈夫なら、ミリイはもう出かけてもいいの？ シオンとお出かけしたい」

「まだ駄目だ。スヴェニア男爵の件が残っているだろう」

そうだった。まだスヴェニア男爵の件が残っていた。もうしばらく大人しくしておくべきなのだ

ろう。仕方がない。シオンと共に影も戻ってきたし、シオンも傍にいるから寂しくない。前より気持ちは楽だ。出かけられなくても、まだ我慢くらいできる。

「……スヴェニア男爵は、南にいるのだったな……」

思案げに言うシオンにドキツとする。スヴェニア男爵を追って、南へ行くことを考えているのだろうか。

「シオン、ミリイは大丈夫！ お出かけなんてしなくていいもの！ 影もシオンも家にいるし、ここならスヴェニア男爵が襲って来てもシオンが守ってくれるものね！」

シオンがまたいなくなるのは嫌だ。スヴェニア男爵が襲ってくるかもしれないことよりも、そちらの方が今の私には怖かった。やっと兄に会える生活に戻れたのに、また会えない生活に戻るの辛い。

「……そうだな、ミリイは俺が傍にいるから大丈夫だ」

私の肩を寄せて頬にキスをくれるシオンに、ほつとする。よかった、スヴェニア男爵を追おうとはしないようだ。それでも心細くて、シオンに抱きついた。

## 第二章 末っ子妹は兄たちと危険の渦の中へ入っていく

夏休みも終わりの時期、ノエル・ル・スヴェニアは愛しいウエリーナが帰郷したという知らせを受け、バチスタ領にあるバチスタ公爵家の屋敷に足を踏み入れた。

小さい頃にノエル自身も住んでいた屋敷なので、顔を確認されただけで簡単に通された。この家の警備はゆるゆるだ。ノエルがこの家の令嬢の部屋へ直行しようが、誰も気に留めない。彼女はこの家でそれだけ大事にされていないのだ。

女遊びの激しい公爵とその息子二人が、どこの下級貴族の妻だか、高級娼婦だかを連れ込むため公爵家だというのに得体のしれない人間が行き来している。

ノエルが彼女の部屋へ移動する間にも、酔っぱらった女が廊下を徘徊していた。それを見てノエルは眉を寄せると舌打ちする。

「下種め」

ノエルが出来るだけ早く皇族になり、こんな場所から大事なウエリーナを連れ出さなくてはならない。

ウエリーナの部屋の扉を叩く。

「ウエリーナ。俺だよ、ノエル」

「ノエル？ いいわ、入って」

美しいウエリーナは、ソファアに座ってお茶を飲みながら寛いでいた。珍しく落ち着いているようだ。いつもこの家に戻るとイライラとしていたのに。

まだ今日帝都から戻ってきたばかりだからか、侍女が片付けに励んでいる。

ウエリーナの前に片膝をつくとき、ウエリーナの手にキスをする。

「会いたかったよ、俺のウエリーナ」

「ほんと、ノエルって私が好きよね。今日ここに到着したばかりなのよ？ 到着して数時間で会いに来るなんて」

「そうだね、俺はウエリーナを愛している。だからウエリーナの姿が見られるなら、すぐに飛んで来るよ」

ウエリーナは澄ました顔でカップに口を付ける。

「けれど、思っていたより早く早く領地へ戻ってきたんだね。秋の宮廷舞踏会まではあちらにいるかと思っていたのに」

「だって、いても仕方がないもの」

「いても仕方がない？ 宮廷舞踏会なら皇太子に直接会えるからと、毎年気合入れていたよね？」

「あつえつと、……そう！ どうせノエルが皇帝になるのでしょうか？ だったら皇太子に会う必要もないかなって！」

なんだ？ あからさまに動揺して答えた。ウエリーナは嘘が上手ではない。何かあるのか？

「それは……皇太子は諦めたってこと？」

「そういうわけではないけれど……別に皇太子が好きなのわけではないもの。愛想ないし、冷たいし。今年はその顔をもう見たくないと思っただけ」

ふむ。これには嘘はなさそうだ。確かにウエリーナは元々皇太子の地位に興味があっただけだ。

皇太子は綺麗な顔をしているくせに笑わないので、近づきたい女たちが遠巻きに見ていることもままあった。ウエリーナがああ顔に興味がないのはいいことだ。

少し前にダルデイエ公爵令嬢のことはどうでもよくなったから殺さなくていい、とウエリーナが意見を変えたことに首を傾げていたのだが、皇太子への興味が薄れてきたのも理由の一つなのかもしれない。

ノエルは使用人には聞こえないように小さな声で話す。

「それはちょうどいいね。実はもうすぐ皇太子は死ぬ予定なんだ。今年中にはね」

「……それって」

「うん、だから来年には俺も皇族の仲間入りをしているだろう」

そろそろ計画も佳境である。数日後には仕掛けが動き出す。

「だから、できればウエリーナには帝都にいてほしかったのだけれど。ここは危ないかもしれないから。宮廷舞踏会までにはいると思っていたから、そこは計算外だったな」

「ここが危ない？」

「少し過激なものを用意していてね」

ただ、計画ではこの屋敷までは火の粉はかからない予定ではあるが、どこで計画が狂うかわからない危険も孕んでいる。

「うん、でも、大丈夫。もしここが危ない時は、俺が迎えに来るよ」

「……何をしようとしているの？」

「ウエリーナは心配する必要はない。俺が皇帝になったら、ウエリーナは俺と結婚してくれるのを忘れないでね」

「……分かってる」

ウエリーナの綺麗な髪の毛にキスをする、部屋を出た。本当はもう少し一緒にいたいけれど、計画を進めるのに忙しい。でもあと少し。あと少しで皇太子が死に、ウエリーナが手に入る。

皇太子には何度も刺客を送った。雇い主が分からぬよう、刺客の国や地域をばらばらにして。なのに、今まで誰も暗殺に成功した者はいない。せめてどこか怪我でもしてくれたら。なのに、怪我一つ負っていないと聞く。本人が強いのか、よっぽど優秀な護衛を雇っているのか。

しかし、それも今回で終わりだ。これから起きることの解決に向け、皇太子は絶対に出てくるだろう。そうなれば、それに乘じて暗殺しやすくなる。この計画で必ず皇太子を殺すのだ。

ウエリーナを手に入れる。そのためなら、この国がどうなっても構わない。



夏休みも終わりの時期だが、まだ暑い日が続くある日。

カイルは執務室で一人チェス盤に駒を置きながら、頭を整理していた。

夏休みの始まりの時期、南部に不穏の動きがあるため、近衛騎士団から信用できる者を数名南部騎士団へ向かわせた。その中にはダルディエ公爵家の双子も入っている。不穏な動きから、バチスタ領が国と戦争でも起こす可能性を念頭に置いていたが、調査する内にそれも何か違うと結論を出した。

では何が起きているのか。情報が足りなくて納得できる答えが導き出せない。ただ、南部騎士団で麻薬が流行っていることは分かっている。それがかなりの大人数になりそうだと推論し、そのために双子を含めた近衛騎士を向かわせたのだ。

不穏な動きをしているのは南部だけではない。先日の報告を見た限り、西部の国境付近はすぐにも戦争が起きそうだという。予想していたことで、その点は前々からアカリエル公爵家と西部騎士団が準備に費やしている。

アカリエル公爵子息のノアとも先日会ったが、西部に関しては戦争が起こっても任せてくれていいと言っていた。頼もしい限りである。

アカリエル公爵も南部が不穏なことを察知しているのだろう。西部は任せられるが、南部は任せると言われているようなものだが、当然そちらはこちらで対処するつもりでいる。

その南部だが、バチスタ公爵は南部騎士団の団長なのに、ほぼ騎士団へ顔を出さず、女と酒に明け暮れている。バチスタ公爵の息子二人もほとんど同じ。親子揃って飽きれるが、その娘ウエリー

ナはミリイを狙っていた。許しがたいが、双子のどちらかが対処したと言っているのです、そこはいったんおいておく。

バチスタ公爵は毎日遊び明け暮れて、よく金が回るものだ。湯水のように金を使い、女遊びをし、けれど仕事をしている様子はない。領地の税収はあるだろうが、その領地の使っていない金に手を出していると思われ、またそれでも足りていないと思う。金の流れを追わせているが、現在届いている情報には細々とした不正くらいしか出てこない。こんな小さな不正ではないはずなのだ。

それにスヴェニア男爵のこともある。先日もまた暗殺者がカイルの命を狙ってきたが、当然捕まえてどこかの者が吐かせた。東公の領地出身の者だった。最近、こういうことばかりだ。暗殺者の出所に一貫性がない。北公の領地出身だったりザクラシア王国出身だったり。もちろん本当にその土地の縁の者が刺客を送っている可能性もあるが、カイルはスヴェニア男爵が裏で取引していると思っっている。しかし証拠が足りない。

刺客を送るにも金がいる。カイルのような皇太子が対象となれば、暗殺者を雇う金も高額となろう。スヴェニア男爵はどうやって生計を立てているかという点、物流関係だった。例えば大きい商會などは商會自身で物を運搬したりもするが、小さな商店だと物流を営む運送業者に頼むこともある。だが物流業だけであれだけの人数の暗殺者を雇うほどの金が稼げるものなのか。

どうにもしつくりこない。何かを見落としている気がする。

数日前に南部騎士団へ送った近衛騎士から中間報告として連絡があったが、南部騎士の麻薬に手を出している人数が南部騎士団員の五分の一。途中の段階でそれなので、まだ増える可能性がある。

なんたる体たらく。騎士ともありながら、そんなものに手を出すとは。

とにかく、見逃しているものが何か分らない以上、備えは必要である。中央騎士団、北部騎士団、東部騎士団から一定数を内密に集まらせている。何かあればすぐに駆け付けられるよう、東のラウ領の南寄りの城で。それで予想外のことにでも対応できればいいのだが。

執務室にエメルが入室してきた。手には書類を持っている。

「整理はできましたか？」

「あまりうまくいってはいない。いつも同じところで引っかかる」

チェスの駒の一つを手で弄びながら、眉を寄せた。

「たぶん考えが纏まらないのは癒しが足りないからだな。エメルはいいな、ミリイに会えて」

アカリエル邸からミリイがダルディエ邸へ戻って十日ほど。アカリエル邸にいた頃は三日に一度は顔を見せてくれていたのに、ダルディエ邸へ戻ってから一度しか来てくれない。

シオンやジュードが戻ってから、その二人にべったりとくっついて離れないらしい。寂しかった気持ちを穴埋めしようとしているのだろう。ただ、カイルはミリイに会う回数が少なくなっただけで辛う辛う日々を送っている。

「仕方ありませんよ。カイル様はダルディエ邸を出禁ですし」

「……エメルがミリイにここに来るよう勧めてはどうだ？」

「それも、兄たちに禁止されているんですよ。あくまでもミリイが自発的にここに来れば、カイル様も会えるのですが」

「……俺の話題を出すくらいならいいのでは。ミリイに俺の存在を思い出させてくれ」  
「ミリイもちゃんと分かっていますよ。ただ今はジュード兄上とシオン兄上の補充に必死なんです」

「俺もミリイの補充がしたいんだ」

「……わかりました。何気なく会話にカイル様の話を混ぜてみます」

とにかくミリイの顔が見たい。抱きしめたい。それだけでいい。

ふとエメルを見ると、エメルがじーっとカイルを見ていた。

「……以前ミリイがここへ来た時、カイル様に頬にキスを貰ってミリイは顔を赤くしていましたよね。ミリイが変でしたけど、あの時は本当に頬にキスしただけですよね？」

まだエメルは気にしていたのか。

「そうだ。……あの時は頬にただけだが、別の日に唇にした」

「え……!? 聞いていませんが!」

「エメルは一度、唇にしていると許可しただろうか？」

「あの時はミリイが自分で唇にしようと言ったからですよ!」

「別の日に唇にした時は、ミリイに許可をとった」

エメルがジト目でこちらを見ている。

「……本当にいつしたんですか。……あ! オーロラが初めて皇太子宮へ来た時ですね!? あの時、私がオーロラと席を外したから!」

「うん、まあ……」

その時も、というべきか。

「それよりも、聞きたいことがあるのだが、ミリイは兄たち全員に唇にキスしてと言ったそうだな?」

「……ミリイに聞きましたか」

「どうしてそんな話になったんだ? また同じことを言いだすのではないかと心配だ」

お陰でミリイにキスできたものの、別の不安が浮上している。

「カイル様のことからミリイに兄たちに今後は言わないよう念押ししたのでは?」

「念押しはしたが……」

兄に言うならまだいい。いや、良くはないが、兄ではない男に言うよりはまだいい。

「色々ミリイに確認したいが、余計な口出しをしてミリイが変な暴走をするのも怖くてな」

「……カイル様とキスすることがなぜ恥ずかしいのかを確認するために、好きな男性のところに行つて同じことをして確認してみたり……なんて、さすがにしないですよね」

「……しないと思いたい」

「……」

ミリイならやりかねないかも、という表情をしているエメルを見ると不安になる。

最近ミリイがカイルの気持ちについて考えてくれているのが分かるし、それは嬉しいのだが、ミリイは時々カイルでも読めない行動を起こすから怖い。そしてミリイが考えた結果、最終的にカイ

ルを選ばない可能性だってある。

そうなった時、自分は本当にミリイを手放すことができるのか。もし手放したとして、もう二度と手に入らないだろう存在を、今後も傍で見ているだけなどできるのか。

胸が痛くなって、カイルはそこで考えるのを止めた。まだ分らないことを想像しても仕方がない。ミリイのことになると、いつも不安で自信なんてどこかに飛んでしまう自分が情けないと思う。溜め息をついていると、今度はソロソが険しい顔で入室してきた。

「カイル様！ 南部にいる近衛からの連絡です。武器の数が合わないので調査したところ、裏で横流しされていたようです」

「何？」

ソロソから書類を受けとる。

南部騎士団の武器庫にあるはずの武器の数と実際の数が大幅に違う。それを横流ししていた可能性の高い人物はバチスタ公爵だという。南部騎士団の団員が武器を持ち出し、バチスタ公爵邸を行き来しているところを確認したらしい。

「……これだったか、バチスタ公爵の金の出処は」

カイルはその書類を握りしめた。こんなことをすれば、バチスタ公爵が持つ南部騎士団の力を弱めるだけなのに。よくもまあ、自分の足を掬うようなことをするものだ。

「……まさか」

武器のない南部騎士団。そして麻薬でうまく機能しない騎士。誰が得をするのか。それが示すも

のは。

——戦争を起こす。

「……なるほどな、売国とはやってくれる。バチスタ公爵かスヴェニア男爵かはわからんが、必ず尻尾を掴んで見せる。——ソロソ、近隣諸国の地図を出してくれ」

ソロソが準備した地図を三人で見る。エメルが険しい顔で言う。

「他国が我が国に戦争を仕掛けるということですね」

「ああ……たぶん、ここだな。ウエルド王国」

ウエルド王国はウロ王国を挟んだ南にある国だ。国盗り合戦が好きな国で、数多くいる王子たちは王位に就くための実績作りとして他国に戦争を仕掛ける。はた迷惑な国だ。

ソロソも険しい顔で言う。

「ですがウエルド王国と我が国の間にはウロ王国がありますよ。そちらが先では」

「……ウロ王国がウエルド王国に協力するとしたら？」

「友好国なのにですか!？」

「もちろん、そう簡単にこちらを裏切るとは思わんが……」

ウエルド王国が直接仕掛けてくるか、ウロ王国を使って仕掛けてくるか。どちらにしても、今、戦争を仕掛けられれば、武器がない上に麻薬が横行している南部騎士団では対処できない。その上、カイルたちの国を不利にするために、バチスタ公爵かスヴェニア男爵、もしくはその両方がウエルドと繋がっている可能性が高い。

どちらにしても情報が足りない。情報を得る前に動かせる駒は動かしておくべきだ。カイルはまたチェス盤へ戻る。どれを動かすか。慎重に、けれど急ぐ必要がある。そして考えた末、カイルは駒を動かした。



帝都にあるレックス商会の一室、ジュードの目の前には国外の人物が二人にこやかに座っていた。一人は今回の商談により契約を結ぶ男性、そしてもう一人は男性が雇っている通訳だ。ジュードの隣にはミリイが座っていて、書類を真剣な顔で見ている。

「うん、いいと思うわ。内容にも間違いはない」

書類には、半分はグラスティール語、もう半分は商談相手の言葉で同じ意味の文章が記載されている。ミリイにはその商談相手の言葉をチェックしてもらっていたのだ。ジュードには商談相手の言葉は分からないが、ミリイは国外の言葉が理解できる。

ジュードが書類にサインし、今回はこれで商談が成立だ。

商談相手が帰ると、ミリイに声を掛けた。

「ありがとう、ミリイ。助かったよ」

「どういたしまして。他にも手伝えることがあるなら言ってみてね」

「うん。さてお茶にしようか」

ミリイの好きなお茶菓子と紅茶を用意し、一緒に休憩をする。

ジュードが帝都に戻ってきて十日ほど経った。まだミリイを一人にするのは危険なので、ジュードがシオンと一緒に行動している。ジュードと一緒にいる時は、護衛と影も増やして警護中だ。

ザクラシア王国での件はシオンに報告を受けた。メレソオ公爵は失敗も視野に入れてなのか、ミリイ誘拐を複数計画していた。メレソオ公爵はやはりミリイに子供を産ませたいなどと、自分勝手な理由でミリイを狙っていたと聞いて、何度八つ裂きにしても足りないほど頭にきた。シオンが奴にとつて死より苦しい制裁をしたのを聞いて、少しは気持ちも落ち着いたが。

ザクラシア王国の件はとりあえず片付いたと見ていいだろう。ただ、まだスヴェニア公爵の件が残っている。ミリイを狙わないと確信が持てない以上、警戒を解くわけにはいかない。

ジュードが帰って来てからのミリイは落ち着いているように見える。しかしエメルやシオンの話では兄たちに会えない寂しさで不安定だったというから心配だった。

昨日も少し様子が変だった。ジュードが添い寝をしていたのだが、ベッドに入ればいつもすぐに寝付くミリイが、その日は考え事をしているようでなかなか眠れないようだった。

「ねえ、ジュード」

「何？」

ベッドでジュードを向いてミリイが口を開く。

「ジュードが結婚した後もミリイの添い寝をしてくれるのは、エレネ様と離れて暮らしているからよね？」